

語り継ぐ 日本の都市環境デザイン

編集的リーダーシップが築いてきたもの



鳴海邦碩 Kunihiko Narumi

1944年青森県生まれ。1970年京都大学大学院修士課程修了。1972年から兵庫県技師として勤めた後、1975年京都大学助手、1979年大阪大学環境工学科助教授、1992年同教授。2004年にビジネスエンジニアリング専攻を立ち上げ同教授に就任。日本都市計画学会会長、兵庫県・奈良県・大阪府の景観審議会会長などを歴任。JUDI関西の立役者。

2015年5月26日(月)18:30~21:00
大阪市立大学文化交流センターにてインタビュー

様々なものが入り交ざった都市づくり

— JUDIに関われたきっかけはどのようなものだったのでしょうか？

鳴海：直接は岸井先生からのお誘いだったのですが、東京で土田旭さんが関わっておられると聞きました。土田さんとは、兵庫県庁にいた時から、仕事で付き合いがありました。ある地域の調査委託を発注するときに、東大と東工大と京大の出身のコンサルタントに、ちょっとずつテーマを変えて同じ地域の調査を同時にやってもらうという仕掛けでやったんです。すると、それぞれやり方がまったく違うんですよ。これは大学にいるよりよっぽど勉強になりましたね。この時に土田さんの都市環境研究所にもお願いをしていました。土田さんとは考え方に共通するところがあって、この業界では一番馬が合いましたね。だから、土田さんが参加するんだったら、じゃあやろうって、そういう感じでした。集まりの名称を決めるときに、最初は都市デザインって言うてたんですが、僕は当時、環境工学科にいたので、環境を入れて欲しいってお願いして、それで都市環境デザインになったんですよ。土田さんの事務所も都市環境研究所だから、それもあったかもしれない。

— 関西でのJUDIはどのようにして動きはじめたのですか？

鳴海：1989年の2月10日に東京で「第1回都市環境デザインを考える会」があって、17日に大阪でも集まりませんか、環境開発研究所の井口さんと一緒にいろんな分野の人に呼びかけたんです。その時は関東からの参加者も含めて16名が参加しています。大学の先生もいるし、コンサルもいるし、ゼネコンもいるし、建築系も造園系も土木系もいる。その当時、井口さんと相談して決めたのがそんなメンバーでした。

— JUDIの目的とはどのようなものだったのでしょうか？

鳴海：関西ではじめてやったフォーラムの冒頭で、多様なジャンルの交流の必要性について、ケヴィン・リンチの考え方を例にお話ししま

した。本当に魅力があって、面白いなと思う都市は、快適とか便利とか、そういう単純なものではなくて、もっと様々なものが交じり合っている。リンチは環境評価の5つの重要な次元のひとつとしてセンス、つまり感覚のことをあげています。自然の力がまず人間の感覚に訴える、つまり緑とか水とか様々な気象がもたらす自然の力です。それから、もうひとつ重要な要素として時間の要素がある。とりわけ時間が磨きかけた環境は僕たちに非常に大きな魅力を与えてくれます。それから最後に、人間のデザインの力があります。人は紙一枚、筆一本あれば、そこに非常に深い世界を描くことができます。こうした人間のデザインの力がなければ本当の魅力のある環境はつくれない。この3つの力が生み出す環境のなかに人間が生きることによって、そこに情景を持った魅力的な都市が生まれます。

日本でも都市づくりが着々と進められるなかで、分野的には、建築があり、造園があり、土木があり、お役所があって、それに民間があります。それぞれの人たちが、それぞれの分野で非常に頑張って仕事をやっているのですが、このばらばらにやっている仕事は、都市というものななかで、融合していくことが期待されていたわけです。僕たちは長い間、楽観主義で仕事をやってきましたが、必ずしもそれで本当に情景がつくられてきたか、魅力ある都市が生まれてきたのかは疑問です。それぞれの分野の人たちが、もう少し相互の協力、交流を図りながら都市づくりの方法を高めていきたいというのが当時の目的です。

人のネットワーキング

— JUDIの取り組みで一番印象に残っているものは何ですか？

鳴海：京都市は、1997年にパリのボン・デ・ザールを模した橋を三条と四条の間につくるという計画を発表して、都市計画審議会まで通ったんです。そこで緊急セミナーをやって、京都市長に意見書を出しました。ボン・デ・ザールはセヌ川に架かっている姿は美しいですが、先斗町の木造の町並みと不調和を生じるし、鴨川のスケールともまったく不釣り合いです。そもそもなんで京都の歴史とまったく関係のないパリの橋を持ってくるんだって、みんな相当怒ってました。結局、

JUDIの働きかけの成果もあって、翌年に白紙撤回されました。

—その他の成果としてはどのようなものがありますか？

鳴海：JUDIの成果と言えば、たくさん本をつくってきました。1995年の「都市環境デザイン—13人が語る理論と実践」では関西ブロックの13人のいろんなジャンルの人たちを集めて1冊にしました。ちょうどこの本が出たすぐ後に阪神・淡路大震災が起こったんですが、関西のJUDIは、当時、結構人数もいたし、いろんな分野の人がうまく入っていたので、復興のために専門家が集まると、たいていJUDIメンバーなんです。だから、意思疎通がはやいし、こういうことをやらなければいけないというのがすぐに分かり合えた。そういう関係性が築けていたと思います。

1996年には過去10年くらいを振り返って、「日本の都市環境デザイン」という本にまとめました。この時は編集に取り掛かって間もなく阪神・淡路大震災が起き、僕は震災復興に関わるようになったので、土田さんにピンチヒッターで編者をしてもらいました。それから、2001年に、若い人に都市環境デザインの内容を理解してもらうために「都市環境デザインの仕事」という本をつくりました。

—成果を取りまとめて発表することはとても重要ですね。

鳴海：意識して、それを大切に展開してきたという思いはあります。それには学芸出版社の前田さんに会ったっていうのは大きいですね。兵庫県の職員を辞して、京大に助手に戻ったときに、当時文学部の博士課程にいた富永茂樹さん（後に京大人文科学研究所教授）と一緒に南米の調査に行ったんです。それがきっかけで、富永さんの先輩の上野千鶴子さんや学芸出版社の前の社長の京極さんとお付き合いするようになったんですね。こういう文系の人と付き合いと、まったく考え方が違うので、都市環境デザインって何なの？みたいなことを言われて、結構、思考のトレーニングになりました。それで、その頃、前田さんは、文学部の哲学科を卒業して、学芸出版に入ったばかりの時に僕の本を担当してくれたんです。

その頃に、富永さんや上野さんなんかと京都で「都市の会」っていうのをつくりました。その研究会の成果を毎月、建築と社会という雑誌に連載したんです。いま考えると、よく載せてくれたなあと思うような内容なんです（笑）。ともかく、何かやったら必ずどこかへ発表するっていうのが僕の主義でした。阪大に移った時にこの活動は一応



「都市環境デザイン—13人が語る理論と実践」(1995)



「都市環境デザインの仕事」(2001)

辞めるんですが、今度は「都市の会・大阪」というのをつくって、その後「アーバングルド」という名称に代わって、研究会を続けていました。JUDI関西の発足にともなって会を閉じました。

それから、JUDIとは別に1998年に「都市大阪創生研究会」というのを設立しました。大阪から逃げられない企業を集めて会費を出し合って勉強会をしようと言って呼びかけました。本委員会という会社の偉い人のための勉強会と若手の人たちの勉強会を並行してやって、若手の方は頻繁に集まって、自分たちが好きなことをやろうと言って、河川に浮かべた台船を使ってカフェの実験をしたりして、本も何冊か出しました。こういうプロセスでいろんな人とネットワークが既に広がっていたというのが、JUDIの背景にはありました。

的確に呼びかける／時々整理する

鳴海：1979年に阪大に赴任した時に、都市設計学の講義を担当しなさいって言われたんですね。当時は、マンフォードやハルプリン、それからリンチなどアメリカの本にはいいのがたくさんあったんですが、やはり日本の実情にあったものが必要だと痛感しました。それでつくったのが「都市デザイン—理論と方法」という本です。この本を担当してくれたのが前田さんです。これをつくれたのは、それまでの蓄積があったからで、ヨーロッパのいろんな都市を調査した「フィールドノート都市の生活空間」や兵庫県にいたときに海外のまちの保存と再生の計画についてまとめた「都市の開発と保存」、それからドクター論文の「都市における自由空間の研究」などがありました。その他は、同じような年代で都市に関心を持った人たちの書けそうなテーマを集めてきて、それをもとに本のシナリオをつくり、こは誰、こっちは誰という風に割り当てて、それらを合体させて一冊にまとめました。著者の中には学生もいたんですが、学生なんかにかかせていいのかっていう批判もありましたが、あんたよりよく知っているからいいじゃないですかと言って書かせました。この本をベースに新たな稿を起こし、JUDI設立の1年前の1990年に「都市デザインの手法—魅力あるまちづくりへの展開」として出版しました。さらに1998年には改訂版を出版し、かなり長い間読まれてきた本だと思います。

その他、都市環境デザインに関連する一連の研究というのをずっとやってきて、いろいろと本にまとめてきました。ドクター論文を本にまとめたのが「都市の自由空間—道の生活史から」、それまでのいろいろな考えを一冊にまとめたのが「アーバン・クライマクス—現象としての生活空間学」、それから兵庫県景観問題懇話会の報告書をもとにつくったのが「景観からのまちづくり」、そのほか「商都のコスモロジー—大阪の空間文化」や「都市・集まって住む形」などです。当時は、学生らと何か研究をやらんと必ず雑誌などに発表させるようにしていました。そういうのを編集して本にするんです。

その後、行ってみたい都市とか、魅力ある都市というテーマに関心が広がっていきました。2002年にやった国際会議では「新・都市の時代—都市のリデザイン／行ってみたい都市の形成」というテーマで、ア

アメリカからオルデンバーグさんをお呼びしてサードプレイスについて教えてもらいました。2008年には創生研でやったことを「都市の魅力アップ」としてまとめたり、小浦さんと長いこと関わった震災復興について「失われた風景を求めて―災害と復興、そして風景」という本にしました。それから、前田さんが「都市の自由空間」はいま読んで全然古くないと言ったので、書き直して2009年に「都市の自由空間―街路から広がるまちづくり」を出しました。というように、本づくりは結構頑張ってやってきました。

これらのうち、「都市の自由空間」と「アーバン・クライマックス」は単著ですが、その他は全て編集したものです。編集には僕なりのやり方というのがあって、例えば、まず全体を組み立てて、割り振っていくタイプのもの。こういうタイプは最初のシナリオさえきちんできれば、あとは書き手の出来次第ですね。誰に書かせるのかを考えるのが一番大変。学生を煽って書かせたものも結構ありますよ。その代り、書かせたものを懇切丁寧にチェックして、どうしてこうなったのかをよく理解させて、ブラッシュアップしていく。それから、雑誌なんか数ページずつ連載したものを並べ替えていくタイプのもは、結構、組み立てに苦労することが多くて、ちいさな面白い原稿はいっぱいあるんだけど、何かを語るために組み合わせていけないといけない。

都市環境デザインに関する主な著書・編著書

発刊年月	書籍名	出版社
1981.10	都市デザイン―理論と方法	学芸出版社
1982.07	都市の自由空間―道の生活史から	中央公論社
1985.03	市街地整備の人的方法	関西情報センター
1987.12	アーバン・クライマックス―現象としての生活空間学	筑摩書房
1988.02	景観からのまちづくり	学芸出版社
1990.03	商都のコスモロジー―大阪の空間文化	阪急コミュニケーションズ
1990.03	都市・集まって住む形	朝日新聞社
1990.12	都市デザインの手法―魅力あるまちづくりへの展開	学芸出版社
1993.12	神々と生きる村 王宮の都市―パリとジャワの集住の構造	学芸出版社
1995.01	都市環境デザイン―13人が語る理論と実践	学芸出版社
1996.04	日本の都市環境デザイン(’85~’95)	学芸出版社
1999.03	都市のリ・デザイン―持続と再生のまちづくり	学芸出版社
2001.11	都市環境デザインの仕事	学芸出版社
2008.03	都市の魅力アップ	学芸出版社
2008.05	失われた風景を求めて	大阪大学出版会
2009.01	野田+福島―路地裏から「ほたるまち」まで	創元社
2009.10	都市の自由空間―街路から広がるまちづくり	学芸出版社

——本を編集することとネットワークをつくりながらリーダーシップを発揮することには共通点が多いように思います。トップダウン的でないリーダーシップの方法について心がけていることがありますか？

鳴海：あまり意識していませんが、もしかすると、そういう勘のようなものが潜んでいる可能性はありますね。やっているのは、できるだけ確に呼びかける。そして時々整理するということです。それが僕のメインの仕事。発表するメディアもたいてい僕が見つけてきますね。

——的確に呼びかけるというのはどのようにされたのでしょうか？

鳴海：JUDIの場合、なにか共通のテーマがあったわけではないので、どういう人に声をかけたかというのはそう簡単にまとめられるものではないのですが、この人たちは都市から逃げない、ということでしょう

か。このころは段々建築家が都市から逃げていく時代でした。それから大型開発も少なくなってきてゼネコンのコンサル部門なんか閉鎖されていきました。でも、この時、声をかけた人たちというのは、都市に何らかのかたちで関わっていくことに、仕事のあるいは個人的な情熱を持っていた人たちだと言えるんじゃないかな。だから必ず自分の仕事のスタンスに都市性が絡んでいる。建築でも造園でも仕事のジャンルは異なっても、そういう精神を持った人たちだと言えらると思います。

——呼びかける際に分野の多様性というのは意識されたのでしょうか？

鳴海：都市計画の分野で集まってうまく運営していくには、やっぱりいろんなバランスがないと難しいですね。だからバランスは重視しました。ただし、そういう人たちがネットワークするんだから、何かの役割分担として集まっているわけではないんです。都市に関わりたいという人はみんな集まればいい。JUDIはそもそも分野の多様性を狙ってつくっているわけではなくて、興味のある人はみんな入れればいいし、あるテーマで議論する時は、それに関心がある人が集まればいいわけです。だから年齢もぜんぜん関係ないですね。

暴力なしに都市を育むことはできるか

鳴海：文系の人たちとまちづくりの議論をすると、彼らにとって僕らは暴力的な存在らしいんですね。都市計画は暴力で、そういうやり方では本当の都市はできないと言われる。つくる都市じゃなくて成る都市を目指さないといけないと言うわけです。じゃあどうすればいいのかと尋ねても、彼らには答えはないんですね。彼らは現象を発見して、説明したり、批評したりすることには情熱を傾けるけど、つくる立場には立ちたくないというスタンスです。

ハンナ・アーレントは工作人の暴力ということを言っていて、職人は物のあるべき精神的イメージ、すなわちアイデアだけを扱うことによって成り立つので、公衆から隔絶され、保護され、身を隠さないと、作品は生み出せない。だから作品をつくる人は暴力的になるんだと書いています。そして、そのことを社会に当てはめようとする行為はやっぱり暴力だと言うわけです。工作人は、創造者である前に自然の破壊者であり、地球全体の支配者のように振る舞う。実際に計画や設計をやっていると気づかないうちにこういう風になってくるんですよ。だから、この暴力性は否定できません。

——その暴力性を和らげるために多様なジャンルの人が集まる方がよいということでしょうか？

鳴海：そういう考え方ではないです。暴力側は暴力団をつくらなければいけませんよ（笑）。計画には暴力性がつきまとうと思います。そのことは変えようがないんです。実際にそういう仕事をやってるわけだから。だけど、人のため社会のためにやる計画が暴力性を持つことはちゃん

と認識しておかないといけないという気持ちはずっとあります。

——メンバーに文系の人を入れようという考えはなかったのですか？

鳴海：それはなかったですね。その組織の問題意識が軽くなるから。だけど時々お呼びして一緒に議論するのはいいと思います。実際、若手の哲学の先生にセミナーにきていただき大きな成果を得たことがあります。

——反対に問題意識が深まるようにも思えますが？

鳴海：深まるようにできるといいのですが。例えば、富永さんは僕らの研究に関心を持っていましたから、個人的にはかなり付き合いました。子育てがしやすいからという理由で、多くの人が郊外に引っ越していくなかで、そこで育った子供たちが大人になったときに、そういう場所を故郷だと思っただろうか、というような話をしたら、とても関心を持ってもらいました。人びとが持っている環境に対する不安とか、社会状況に関しては、彼らはすごく敏感なんですよ。だけど、どうすればいいかとか、そのためにどういうルールが必要かというようなことになると、関心が離れてしまうのです。

いわば文理融合的な考え方を指摘している人はたくさんいます。まず、ジェイン・ジェイコブスは都市の多くの要素の相互関係は複雑なものだけでも、その関係の仕方には偶発的なものや不合理なものはないと言っています。それは検証できないけれども、感覚的には理解できるものであると。新アテネ憲章でも、古い都市に見られる多文化の街は社会的・経済的活力を供給できると書いてあって、これに対して、新しくつくられた街にはそういう活力がないのはどうしてかということの問題にしています。デービッド・ラドリンは都市の再開発はどれも失敗していると言っています。ピーター・ホールは都市計画を教えるときに、もっと都市の経済というものを考えないといけないと言っているし、ニコラス・フォークは都市計画には経済活動の新しいかたちが必要で、都市計画家よりもまちづくりの実践者や社会企業家の方が必要だと言っています。これらは、何だかはっきりはしませんが、共通するものが感じられる。文系の人たちが言う暴力的な都市計画にしないためには、ここに通底しているものが何なのかを明らかにする必要がありますと考えるようになってきました。

ロバータ・グラッツはジェイコブスの後継者を自任している人ですが、まちづくりはアートであって、計算や予測といった科学では捉えられないと言っています。彼女の言うアートは芸術という意味ではなくて、技とか芸のことです。だからまちづくりの担い手は芸に長けていないといけない。でも、そんなことは学校では教えてくれないし、日本ではそういう分野はまだ確立していない。芸人はお金をもらわないとやっていけないんだけど、プランナーばかりがお金をもらっているわけです。また、彼女は「Urban Husbander：都市を育む」という言い方をして、何か新しいものを付け加える前に、今あるものを強化するとか、養育するということの重要性を指摘しています。

孤独な切磋琢磨と和気藹々の連携

——これまでの鳴海先生のリーダーシップのあり方が、いまのJUDI 関西の雰囲気をつくってきたということがよく分かりました。

鳴海：当時から、そういうやり方に意識的だったかどうかは分かりませんが、そういう捉え方をするようになったのは、いろんな人たちと本をつくった経験からだと思います。当時は、みんな若いから自分が熱中していることを必死で書いたんですよ。完成までには、何度もやり取りをして、相当密度の高い議論をしました。この時の感覚でずっとやってきたというのはあるかも知れません。

——機会を与えて、煽てたり、議論を交わしたりしながらまとめていく、そういう編集的なリーダーシップのとり方は、とても現代的だと感じます。一方で、トップダウン的なリーダーシップと違って、そういうやり方をどのように継承していくことができるかは、すごく難しいようにも思えます。

鳴海：今日の場合、それを考えるきっかけにして、ここからはじめて欲しいですね。成熟したいまの日本の状態は、社会が一方方向じゃなくて、いろんな方向にテーマが広がっているんで、僕らが若いころに比べれば、プロになろうという人の目標がばらけてしまっている。学生なんかを見ていても、何をしたいのかがちょっとはっきりしない人が結構多いなって感じるんですよね。そういう状態のなかで、これからの都市環境デザインに求められるものは、「孤独な切磋琢磨」と「和気藹々の連携」という、この両方が必要だと思います。そのためには、学会論文以外に発信する場を持つことが大切だと思うんですよ。昔は、本とか雑誌とか、そういうメディアだったけれども、今はもう皆が勝手にブログを書いたり、つぶやいたりして飛ばすだけでしょう。そういうのは何かちょっと無責任で、自分はこういうことをやったんだという証にならないんだよね。あるシナリオを持ってそれを検索できる人はいいけれど、それができない人に対しては、個別化した情報っていうのは無意味ですからね。だから本とか雑誌に類する何か別の手段を考えないといけないんじゃないでしょうか。例えば、Project for Public SpaceというアメリカのNGO的な組織のつくっているホームページはとても質が高く、いろんなメンバーが書いているものが雑誌風に編集されていて面白いなと思います。こういう新しい表現媒体のかたちを工夫することが必要だと思いますね。

記録：武田重昭・坂本幹生（大阪府立大学）